

# アトリエ 琉游舎 だより 59号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)

2019年8月14日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

## 寒蝉鳴く立秋

- 1年を二十四に等分したものが二十四節気。それぞれを初候、中候、末候の三つに分けて七十二候と呼びます。立秋はおよそ8月8日から22日まで。前は大暑、後は処暑です。
- 「寒蝉鳴」は立秋の中候、13日から17日までのこと。「ひぐらしなく」とも「かんぜんなく」とも読むようです。どうやら蝸が鳴きはじめる頃を表したようですが、どうも釈然としないのです。というのもここコリーナではすでに7月中旬梅雨も明けない頃から夜明けとともに蝸が鳴きはじめます。明るくなり始める4時前に蝸が鳴き、太陽が顔を出す4時半過ぎには鶯が鳴きはじめます。私の目覚まし時計なので間違いはありません。
- そこで調べてみると「寒蝉」にはどうやら二説あるらしく、「蝸」と「法師蝉」の二つを辞書はあげています。蝸は「カナカナカナ」となぜか物寂しい響きで、立秋の夕暮れにふさわしい鳴き声です。一方、法師蝉は「ツクツクボウシ」と結構賑やかな鳴き声です。
- さて、どちらの蝉が「寒蝉」と呼ぶにふさわしいか。鳴き声では蝸に軍配を上げたいのですが、季節感からすると法師蝉の方が合っているような気がします。ちなみにここコリーナではそろそろ「ツクツクボウシ」の鳴き声を聞くようになりました。お盆も過ぎると、うるさいほどの「ツクツクボウシ」の鳴き声に溢れることでしょう。
- 蝉は幼虫の期間が数年にも及び、成虫になってから1週間で生涯を閉じると云われています。長い地中の暮らしからやっと地上に出たと思ったら1週間の命。「生死不定」儂い命と考えるか、幼虫時代からすると数年は生きているのですから蝉は長命な昆虫と考えるか、「生死の不可思議」は人間の知恵でははかれない、あるがままの命の姿。今日も寒蝉の声を肴に、夏を惜しみながら一献傾けます。

**読書会**

8月27日(火) 13時半から  
9月10日(火)

**写経会**

9月1日(日)  
13時半から

**詩話会**

9月7日(土)  
13時半から

**居酒屋の会**

8月25日(日)  
16時から

**映画会**

毎週木曜日  
13時半から

**お盆施餓鬼法要**

8月18日(日)10時半から

8/22	13時半	真昼の決闘 (84分)	ゲイリー・クーパー、グレイス・ケリー主演。かつて保安官に捉えられたならず者たちが報復にやって来ると知っても彼を助ける者は街にはいなかった。西部劇の代名詞となる傑作。
木			
8/29	13時半	終着駅 (89分)	ビットリオ・デ・シーカ監督。青年と恋に落ちた人妻。別れを決意し独り汽車に乗り込むが、90分のリアルタイムで描かれたメロドラマの傑作。
木			
9/5	13時半	怒りの葡萄 (119分)	ジョン・フォード監督ヘンリーフォンダ主演。刑務所を仮出所したトムと土地を失った彼の家族はカリフォルニアへと向かうが、夢の地で待ち受けていたのは厳しい現実だった。
木			
9/12	13時半	逢びき (86分)	デビッド・リーン監督。平凡だが何不自由なく暮らす人妻。彼女が経験する医師との切ないラブストーリー。二人の恋心は決して許されないものだった。
木			
9/19	13時半	市民ケーン (119分)	オーソン・ウエールズ監督。時間軸を飛び越え、人々の証言によって富豪ケーンの人物像に迫る傑作。その手法の見事さと映像テクニックは傑作の一言に尽きる歴史的な名作。
木			
9/26	13時半	恋愛手帖 (108分)	ジンジャー・ロジャース、デニス・モーガン主演。働く女性の典型として描かれたキティーの二人の男性の間で揺れ動く女性心理を描いた恋愛映画、究極の傑作。
木			

毎日日課のように歩くコリーナの道には1年中いろいろな生きものの姿が見られます。その道は雑木林と池との間にある道です。この夏の時期は池の面いっぱい広がる緑の蓮華の葉と清楚な白い花。その間を悠々と泳ぎ回る鯉たち。草や木々の緑からはき出される酸素のあまりの多さに、逆に息苦しくなるくらいです。雑木林の上では「ちょっとこい、ちょっとこい」とコジュケイの誘いの声、「ガーガー」とカラスの拒絶の声、そんな合間に聞こえる「ホーホケキョ」のなんともとぼけた合の手。池の草むらでは様々な虫たちの声の合間からガマガエルとおぼしき間の抜けた太い声が重なり、樹上では「ジー」と同じ音程の上を「ミーンミーン」と音をかぶせる蝉たちの饗宴。夏は1日中命に溢れています。

私達はその命を音や空気や匂いで感じ取ることはしても、手にとってその命を確かめようとはなかなか思わないものです。ペットを除けば、手にとりたいと思うのは甲虫やトンボくらいまでで、ほかの生きものは物好きでもないかぎりは逆に忌避してしまうでしょう。声や気配でその生きものを感じ取っているうちはまだ安心していても、その存在が自分たちの領分に侵入したと見るやいなや人はその生きものを遠ざけるでしょう。私達は自分の見たい生きものだけを見て、見たくない生きものは拒絶し、場合によっては殺傷という差別を行っているのです。生きものたちの「生」は人間の間では不平等の扱いを受けているのです。

見たくない意識が拒絶していても、目の端にその姿が入るとついその姿を確かめたくなるときがあります。そんなときはその生きものはすでに命を失った状態が多いのです。今、400メートルあまりのいつものコリーナの道を歩くといくつもの亡骸を目にすることができます。車にひかれたであろう蛇や蛙。命尽きて木から滑り落ちた蝉、蟻に引かれるいくつもの昆虫たち、強い子孫を残すために青いまま自ら落下した栗たち。事故死、自然死、自死、捕獲された死、闘争による死、自然摂理による死が実はそこら中に溢れています。しかし私達をそのような死を、見たくないもの、気味わるいもの、穢らわしいものとして目をそむけてしまっています。死はどんな死でも見たくないものです。すべての生きものたちの「死」は人間の間では見たくないものとして平等の扱いを受けているのです。

私が「生死」について語っていきこうとすると、私が観たままの生き物の「生死」を明らかにしなければなりません。ここまで述べたようにそれは人は見たい「生」を見、見たくない「生」は忌避するものであるということです。人の「生」の見方には差別があるということです。反対に人は「死」はすべて見たくないものとして眼を背けてしまうということです。人の「死」の見方はどのような生き物であろうと平等であるということです。「生」は不平等で「死」は平等。このように観た私のあるがままの生き物の「生死」は、では人にも当てはまることなのでしょうか。実は「生死」を語る時この点が一番重要な分岐点であると私は考えます。生き物の一員として人間を見るか、生き物と対峙した存在として人間を見るか。

人間はこの地球に存在するものの中で理性を持つ唯一の生きもの、と考える思考は西洋の合理主義の基本です。神が人間だけに与えた理性という能力によって他の存在を支配することを認められた存在なのです。人は有史以来自然を支配することにありとあらゆる能力を浪費してきました。そこから生まれる存在認識は「自己と他者」です。「生死」についても「人の生死」と「それ以外の生死」が支配と被支配の関係にあることは必然でしょう。人間同士でも「私の生死」と「他の生死」が同様の関係に発展することも必然なのです。私はこのような認識の中で「生死」を語ることは不可能です。語るだけの能力があるかないかの問題以前に、そもそも私には「神(理性)⇒人間(理性の代行者)⇒他の存在(理性の道具)」という思考は、私自身が安らぎの処にお釈迦様と供に歩いていくには全く必要のないものなのです。私は「理性」ではなく「信」で語ろうとしているのです。皆さんが理性や道徳や常識などの社会的な知恵でもし私の言葉を聞いたとしたら、非常識とか身も蓋もないではないかと感じることもあるかもしれませんが、語る前から言い訳がましく聞こえるかもしれませんが、「理性」ではなく「信」で語るということは往々にしてそのような摩擦や価値の顛倒が起こりうるものだとご承知いただければ幸いです。

少々話が煩雑になったようです。まとめると、私が今後語る「生死不二」には自分とそれ以外の存在との間に区別はないということです。「自他不二」のなかで「生死不二」を語っていきます。「生死」があると考えられている存在全ての中で、人の「生死」も語るべきではないかということです。生物としての人間の「生死」を明らかにすることが、今生きている私たち人間の毎日を如何によく生きるかを明らかにすることだと考えるからです。「生」は不平等で「死」が平等であると私が考える通りならば、人は血や環境の差別がある中で生まれ、生まれながらのDNAや出自を差別から個性に変えることでよき生を全うし、死を迎える中で初めて平等になるはずで、人はすべて平等の中で同じ権利をもって生まれるという常識に、私は今、異を唱えています。ありのままに「生」を見るならば不平等であると観ることから始めなければ、よき生を全うし、よき死を迎えることはできないはずと考えます。そうでなければ平等な「死」も迎えられないでしょう。「信」が希薄な現代、人は「死」をも平等と感じることが出来なくなっているのではないのでしょうか。そしてそれを作り出している原因の一つが宗教であるとしたら、そのような **琉游舎：戸井 出琉・恭子** 宗教は他の原因と共にいずれ消滅させなければなりません。 **お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152** 「よき生を全うし、よき死に至るために。」(出琉) **矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850**